

# 夕べの雲

## 高齢者文学人生論

庄野潤三 (1921-2009)

『夕べの雲』 (1981) 「日本経済新聞」

『プールサイド小景』 (1959) 「講談社」

『文学交友録』 (1995) 「新潮」

『孫の結婚式』 (2002) 「講談社」

もうあの時は死ぬかと思った。あああ、  
十三で 死ぬかと思った。

庄野潤三『夕べの雲』は、丘の上の家に住む夫婦と中学生の長女、小学生の長男、次男の五人家族の平凡な日常生活を淡々と描いた小説である。時代は昭和三十年代後半。

夫は小説家だが、大酒を飲み、放蕩を繰り返すような破滅型作家ではない。生活態度は堅実で、家族を大事にするサラリーマンのようだ。

昭和二十九年下半期の芥川賞受賞作『プールサイド小景』の主な登場人物も仲のよい夫婦と子どもたちだった。小学校の水泳コーチの先生は彼らを見て、「夕食の前に、家族がプールで一泳ぎしてゆくんなんて。あれが本当の生活だな」と言ったが、実はその夫は浮気をした上に、会社の金を使い込んで、それがばれ、クビになっていた。

『夕べの雲』の夫の場合はそんなことはない。したがって、特にこれといった事件も起こらないが、雷が家に落ちたことがある。丘の上に一軒だけ建っていて、家のまわりには木もない。早く風よけの木を植えなくては危ないと夫は心配していたが、雷まで考えが及ばなかった。

台所の方で、二、三度、続けざまに破裂するような音がしたかと思うと、台所中が鳴りだし、赤くなった。それは写真をうつす時にマグネシウムを焚いたような明るさであった。

「もうあの時は、死ぬかと思った。あああ、十



## 夕べの雲

—— 高齢者文学人生論

三で死ぬかと思った」と長女は言い、「女学校の時、空襲でうちの庭に焼夷弾が降ってきたけど、あの時より今日の雷の方がずっとこわかったわ」と細君は言った。

その後、庄野潤三は、脳出血で死にかけて、あやうく一命をとりとめたことがある。六十四歳のときだ。それ以外はほぼ平穩無事で八十歳を過ぎ、『孫の結婚式』に出席することができた。

私のことを「おじいちゃん」と呼ぶ孫が八人いる。長女のところは男の子が四人、長男と次男のところは男と女が二人ずついる。みんない子だ。このうち長女のところは、上の二人が結婚した。三男も今年の秋に結婚式をあげる。ひ孫もそのうちにふえて来るかもしれない。

日常生活ではごくありふれた、おめでたい話だが、破滅型作家がこれを読むと、「文士の風上にもおけない」というかもしれない。

しかし、四人の男の子の母は『夕べの雲』では十三歳の中学生だった。落雷で死んでいたら、おじいちゃんは孫の結婚式に出席できない。

庄野潤三は八十五歳のとき、脳梗塞で倒れた。八十八歳で、老衰により逝去。辞世の句はない。代わりに恩師尚紅連の句を添えておく。

おさらばと柿菊茸金木犀

尚紅蓮

(グレン・ショウ)